

生々しい実態の報告

被災地で活動の企業から

ランナー
会
トッ
ナー

技術開発や新規事業に意欲的に取り組んでいる、全震が続き避難を繰り返す中での救援作業。動揺する建設業者の会「建設トッランナー倶楽部」は25日、東京都文京区の事務局で幹事会を開いた。未曾有の大震災を受け、建設業界として何ができるか、何をなすべきか、現地の状況について情報交換をした。

中部地方整備局のTEC—FORCEの一員として被災地に赴いた幹事社の(株)長瀬土建(岐阜県高山市)の長瀬雅彦社長は「排水ポンプで水を汲み上げると遺

体が浮き上がる。その上余震が続き避難を繰り返す中での救援作業。動揺する建設業者の会と自治体との災害協定のあり方、運用を再確認すべきだ。

被災地の人手不足、重機不足、食料不足の実態は深刻だ。先導的に復興作業に取り組む深松組でも、震災直後は食料不足から「何も食べていないのに復興作業なんてできない」と作業員から苦情。玄米はあっても精米ができない。それを聞いた幹事社の(株)富士建設(神奈川県足柄上郡)の文



被災地での対応や問題点を話し合う

一方、法と行政の壁で、復興作業が思うように進まないこともある。海水に浸かって当面耕作できない農地ですら、資材はあるのに仮設住宅を建てられないと、地域の建設業者は怒っている。また行政区の境界線も不明。一方、廃棄物の処理を急ぐために、環境省が木材廃棄物の焼却処分を急いでいるという話を米田教授は耳にした。CO2削減どころではない。環境省と林野庁双方と掛け合い、リサイクル燃料として活用すべく、受け入れ先、輸送、処理・処分ルートまでコーディネートした。燃料としてリサイクルする際の課題となる塩分の除去についても解決法を見出した。このシナリオが最善だと、中央官庁は舌を巻いたという。

字和男社長は、米と精米機を被災地に届けた。食糧問題が落ち着くと「がれきの処理をするのに、革手袋がない」との要望。文字社長は即座に革手袋を届けた。近辺では担当機関がいままで作業が思うように進まない。慶応大学教授の米田雅子同倶楽部代表幹事らは14日から3日間、中部森林開発研究会と一緒に、支援物資を携え、宮城、岩手両県沿岸の被災地に赴いた。同倶楽部は「林建協業」(林業と建設業の連携)を推進しており、大震災で木質系廃棄物が大量に発生したことに着目、今後どのようなサイクル、処理が必要なのかを調査した。被災地の沿岸を中心に、倒木、倒壊した家屋、流れた製材など木材廃棄物が各所で堆積している。分別や破碎、野焼きをしているところもあるが、行政の管理のもとで進められているかどうか不明。一方、廃棄物の処理を急ぐために、環境省が木材廃棄物の焼却処分を急いでいるという話を米田教授は耳にした。CO2削減どころではない。環境省と林野庁双方と掛け合い、リサイクル燃料として活用すべく、受け入れ先、輸送、処理・処分ルートまでコーディネートした。燃料としてリサイクルする際の課題となる塩分の除去についても解決法を見出した。このシナリオが最善だと、中央官庁は舌を巻いたという。

(中本)